

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 29 日現在

機関番号：34317

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770131

研究課題名(和文) 西洋古典に見る色彩表現 「色」の象徴性と社会的役割に関する考察

研究課題名(英文) Colour in Antiquity: Colour Symbolism and its Effect on Society

研究代表者

西塔 由貴子 (SAITO, YUKIKO)

京都精華大学・人文学部・講師

研究者番号：60411948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ホメロスの作品を中心に西洋古典に著された[色][色彩修飾語]を精査・分類・整理し、詩句の文学的効果を考察することによって、詩人の創造性および「色彩」の象徴性や社会的役割の解明を探究した。英国リヴァプール大学等訪問先の大学でも充実した調査を実施し、当初の予測をより実証的に検証することができた。多分野に関連する色彩表現の深層について一定の見解を提示し、さらに、停滞していた文献学的研究に新たな活路、つまり 色-音-動き という次につながる方向性を見出させたことは大きい収穫であった。国際的動向を見据えて研究を発展・展開させていくための今後の基盤を築くことができ、有意義な研究であった。

研究成果の概要(英文)：My major research interest is the perception of 'Colour' in antiquity. I investigated its symbolical representations and social roles, focusing particularly on the Homeric epics. Assembling colour or colour-related terms, I analysed how those colour presentations are arranged and examined how they function in context. Through this process, I have uncovered fresh new angles on the relationship between colour, sound, and movement, which are crucially important in developing my research. As a result, I have clearly established that colour expressions are deliberately chosen in each context as significant indicators, thus doubtlessly the poet intended to create his story as colourfully as possible.

As 'colour' is related to multitudinous areas, considerable potential for this research is to be expected in every possible way. Culturally innovative views have been proposed, which would certainly contribute to the academic community internationally and to our society as well.

研究分野：西洋古典学

キーワード：ホメロス叙事詩 色彩表現の文学的効果 シンボル 『イリアス』 「色」の象徴性 「色」の社会的役割 色、音、動き 古典における色彩感覚

1. 研究開始当初の背景

この分野における研究は、欧米では Gladstone (“Homer’s Perceptions and Use of Color,” 1858) に始まるが、西洋古典における色彩表現を比較検討した研究成果は国内では見当たらない。国内において、色彩感覚に対する科学的な研究は進展する一方、文学的、歴史学的な研究は立ち遅れており、色彩感覚への文化的背景やその影響力に関する議論も見当たらない。ゲーテの色彩論、ニュートン光学等、欧米の文献からの引用または訳本が散見されるにとどまっている。また、欧米での先行研究も、ある一定の作品群または時代に見られる色彩表現の調査に限られている。

19~20 世紀の欧米の研究では、先述の Gladstone を起点として、「詩人は定型句表現をパッチワークのように組み合わせる物語を作成したので、色彩感覚は存在しない」という見解に対して、詩人の創造性を主張する見解が多く議論された。しかし、作品中に見られる[色][色彩修飾語]を意味すると思われる表現を子細に拾い出し、古代ギリシアの色彩修飾語を、現代の言語にあてはめるといった言語学、文献学的考察が主流で、古典語を現代語に置きかえるという機械的作業自体に限界があった。20 世紀後半から近年の研究では、それまでの研究方法の問題点を踏まえて、より包括的に、文化的・社会的に「色彩」の役割や象徴性を分析する方向にある。Bradley (*Colour and Meaning in Ancient Rome*, 2009) の研究では、古代ローマ社会において、倫理的、政治的、社会的に極めて重要な位置を占める「色彩」の役割が論じられている。Bradley の研究対象は古代ローマ期に限定されているが、様々な分野に反映されうる「色彩」の象徴性の役割は注目されてきている。

以上のような経緯を踏まえ、本研究では、これらの研究成果を基盤に、西欧思想・文化の源流とされるホメロスの作品を中心に、西洋古典における色彩感覚の解明を目的として、これまでの色彩修飾語に関する研究を見直し、再調査する。現存する文献の少ない時代にあつて、個々の作品における「色彩」の果たす役割を分析・考察することは、その社会や文化の深層を考察するうえでも有為であり、貴重・稀少な研究資源たり得る。さらに、文献学的調査を基盤としながらも、先行研究の欠落部を補完しつつ、これまで着目されていない色彩修飾語や色彩表現の分析・考察を行うことによって、文化的・社会的な広い観点から[色][色彩修飾語]の果たした役割を整理する。さらに現代における色彩感覚との比較・検討を行って、「色彩」表現の文学的効果、文化的特徴を見出すことを展望する。

2. 研究の目的

本研究は、吟遊詩人ホメロスの作品を中心に、

西洋古典に著された[色][色彩修飾語]を精査・分類・整理し、詩句の文学的効果を考察することによって、詩人の創造性および「色彩」の象徴性や社会的役割を提示することを目的とする。具体的に、次の3つを柱に据えて研究を遂行する。

(1) [色][色彩修飾語]などの色彩表現の抽出

ある色彩修飾語がどのように用いられているか、色彩表現の用法を分析・整理し、「色」に関わる表現の文学的効果だけでなく、社会的・文化的な「色」の役割を明らかにする。色彩修飾語が文脈どのように使用されているのか、を分析・考察することによって、その言葉が包摂する色彩のイメージの歴史学的変遷をたどり、その文化的・社会的役割にも言及する。

(2) 詩人の創造性に基づく「色」の象徴性や文化的特徴および西洋古典における色彩感覚の解明

これまでの研究成果を検証し、それらを基盤に西洋古典における色彩修飾語の用法を総括する。特に、これまで定説化している、または全く触られていない色彩修飾語について、新たな視点からその色が象徴するイメージや含意を考察し、色彩表現全体を包括するデータを構築。現代思想にも通底する色彩感覚の連関性の解明を試みる。

(3) 色彩表現の変遷と社会・文化・思想の発達との連関性の提示

西洋古典における「色彩」に関する先行研究にアプローチし、古代ギリシア語を機械的・画一的に(現代)言語に置き換えようという試みによって色彩表現の可能性が短絡視されてきた状況を顧み、プラトンやアリストテレスら他の西洋古典の哲学者の文献を繙き、それぞれの色彩表現に関する「色」の起源と思想の変遷を考察。文化的・社会的・教育的側面において色彩表現が与えた影響や社会的役割を浮き彫りにする。色彩感覚が醸成された文化的背景をも探りながら、[色][色彩修飾語]をキーワードとして、西洋古典に見られる色彩表現を比較検証し、文学に留まらない「色彩」の役割や効果を解明する。

3. 研究の方法

本研究目的達成のため、(1)西洋古典における色彩・色彩修飾語の抽出、(2)それぞれの色彩・色彩修飾語の用法の分析・整理、(3)「色」に関する表現の文学的効果の考察、(4)「色」の社会的・文化的な役割についての考察、という4つのテーマに即して研究を遂行した。

文献調査を中心に組み立て、原書に当たり原綴を重視することを基本方針とした。そのため稀少書の調査に関しては、現地に赴き書誌学的な資料を精緻に収集すると同時に、可能な範囲で複写を行い、整理・分析・考察

の基礎資料を彫琢した。分析・考察に際しては、過去の研究成果を基盤に、先行研究の検証および欠缺に留意すると同時に、訪問先の大学の研究者からの情報提供や最新の研究成果を注視し、客観性・普遍性のある成果を導き出すよう努めた。

4. 研究成果

本研究は、欧米では主に文献学的研究が行われていたが、日本においては皆無に等しく、しかも古代ギリシア語の色彩修飾語を現代語に置き換えるだけの語彙論も行き詰まり停滞していた状態のところ、新しい角度から考察しこれまでにない新鮮な見地を開くことを試みたものであった。総括すると、本研究の目的であったホメロスを中心として西洋古典における色彩表現の役割の解明に迫り、文脈においてプラスとマイナス両方の働きをもつ色彩の文学的効果、聞き手または読み手の関心を惹きつけるというような見解を示すことができ、有用な知的貢献をすることができたと考える。訪問先の大学でも充実した調査を実施し、当初の予測をより実証的に検証することができた。しかも次のステップにつながる方向性を見出せたことは大きい収穫であった。国際的動向を見据えて今後の研究を発展・展開させていくための基盤を築くことができ、有意義な研究であった。

文献収集や論文執筆、研究発表準備のために使用した主な研究機関は以下の通りである。

英国：ロンドン大学、Institute of Classical Studies (ICS)、リヴァプール大学、エディンバラ大学、セント・アンドリュース大学
イタリア：ポローニャ大学
ギリシア：プリティッシュ・スクール(BSA、アテネ)

(1) 西洋古典における色彩表現の役割

最初の2年間は、文献収集と精査、そして色彩表現の分析に努めた。研究代表者のそれ以前までの分析結果とも絡みあわせながら、特に、「暗い」「灰色」と訳される *kelainos* や「赤」「明るい」と訳される *phoinix* の用法にスポットをあてて、他の修飾語との比較・考察を行った。例えば「血のように赤い巨大な蛇」や「真紅に染めた上着」等の *phoinix* が使用されている表現を抜き出して用法別に分類・整理しながら色彩修飾語の用法やその効果を分析考察した結果、古典における「色」の認識は、現代とは異なっているものの、その一方で、現代思想との関連性も見えてきた。「色彩」の文学的効果および西洋古典によって醸成された色彩感覚が西欧の社会・文化・思想に及ぼした影響も探ることができた。

最終年度は、前年度までの成果を発展させて考察を進めた。特に *argos* を中心に、4月に京都大学定例研究会で、6月に西洋古典学

全国大会にて研究発表を行なった。前年度末に気づいた点「色、動き、そして音」にも着目しながら、「白」や「輝き」「はやい」を表現する言葉の文学的効果について、詩人の創造性とともに「動き」という視点の重要性、そして今後の可能性、現代の色彩感覚との関連性を提示した。多数の複合語が存在するため (*arguroelos* や *argurodines* 等々)、それらをまとめて一定の理論を提示するには、物語の中にある他の用語にも言及する必要があるとわかった。「色」と「輝き」という色彩感覚の探究のための新しい且つ重要な視点ならびに「色・音・動き」という構図をさらに掘り下げて具体的に把握することができた。

その後、白や輝くなどの明るい色合いを示す他の色彩修飾語 (*leukos*, *leirioeis*, *enages*, *marmareos*, *leirioeis* 等々) の調査に着手。詩人による色彩修飾語の表現方法を叙述し、それらが綿密な思考による使用であることを検証した。また、男女間での色彩表現の使い分けが確認され、古代においても女性には明るい色・男性には暗い色(?) というような感覚が存在した可能性を示唆することができた。現代社会の色彩感覚との関連性や色彩表現の社会的役割にもつながる成果である。これらの表現を整理、分析、考察した結果の一部を、夏季にセグド大学(ハンガリー)にて、春季にはリヴァプール大学(英国)とエディンバラ大学(英国)にて研究発表した。

灰色などの暗い色合いの色彩表現については、編集を繰り返し、*The Uncertain World of Darkness in the Iliad (In Thinking Colors: Perception, Translation and Representation, edited by V. Bogushevskaya and E. Colla, Cambridge Scholars Publishing, 2015, pp. 95-117)* の中で、男性に多用される灰色(または暗い黒)が表現している象徴性や社会的役割について研究代表者の見解を示すことができたと考えた。

また、最終年度の成果の一部をまとめたものをハンガリーの学術雑誌 (*Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae*) に提出・受理済。刊行は2016年秋頃の予定。また、これまでの研究を総括し、その一部をまとめた論文がイタリアの研究文献 (*RICERCHE A CONFRONTO*) に掲載される予定である。さらに、まだ執筆段階のものもあり、それらを論文にまとめて海外の研究文献や学術雑誌などに発表していく予定である。

(2) 当初予期していなかった事象が起きたことにより得られた新たな知見

上述のように、「色」だけではなく、「音」や

「動き」という観点を含めた文脈の考察、および「色・音・動き」という三角形の構図が重要な視点であることが浮き彫りになった。具体的には、以下の経緯である。

欧米では受容研究が非常に盛んになっており、映画や絵画などを活用して（西洋古典）文学を論じる研究成果が多数刊行されている。Visualizingする、つまりコンテクストを読むだけではなく、視覚的観点からテキストを読み込んでいく方向にある。受容研究の影響も受けて、映画や絵画といった作品と組み合わせる分析していく方法も頻繁に見られ、文学研究の可能性がここ数年で大きく広がってきた。ホメロスの作品を映画のように捉えて論じる文献も多数見られる（Hesk (2015, 2016) 等）。こういった視点は欧米では高く評価されながらも、残念ながら日本ではまだ認識度が低い。可能な限り文献を入手し、それらを精査した上で、色彩表現に着眼点をあて、色彩修飾語が使用されている文脈から見える、または聞こえる「動き」と「音」について考察を進め、見解を提示した。文学作品を単に「読む」だけではなく、「見る」「聞く」という視点から理解しようとする試みはこれまでとは異なる角度からの研究方法である。特にこの点に関しては、本研究の主たるテーマである色彩表現は時代の波にのった、将来的にすぐれた研究成果が期待でき、今後につながる有益な成果であった。

また、海外にて研究発表をする機会を得たことにより、海外研究者とのコンタクトに深みと幅が出た。そこから「色」をキーワードに、分野の垣根を超えた文理融合の共同研究を企画している。最新の現代科学の知識や技術を駆使すれば、「葡萄酒色の海」等の表現の分析考察に応用できるという側面があり、可能性は無限大に広がるはずである。

(3) 今後の展望

古典に見られる色彩修飾語を画一的に現代の言語に置き換える試みは数多くなされてきたが、色彩表現は文学に留まらず、芸術を含め多角的な研究分野の対象として取り上げられている。また、「色」[色彩修飾語]を総合的に検証し、体系化を試みる本研究は、斯界研究に寄与することが期待されている。さらに、「色彩」は日常生活において何気なく行っている選択・決定にさまざまな影響を及ぼしている。色彩表現の緻密な調査とデータ化は、人類がどのように色を知覚してしてきたのかというプロセスを理解するうえで大きな役割を果たすとともに、選択・決定そのものを左右する要因を探ることにもつながる。その他、西洋古典の色彩修飾語の分析と考察は、教育や心理学をはじめとする学術的関心を惹きつけ、現代社会の多くの分野での応用の可能性が想定され、次代の活用が大いに期待される。

本研究は、上述のように、従来体系的に考

察されることのなかった当該分野の研究に新たな視座を提供し、色彩表現が及ぼす文学的効果や社会的役割など新たな見解を提示する可能性を大いに孕んでいる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

(受理済) Yukiko Saito, Brightness and Movement of Argos in Homer's *Iliad*, *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* (ハンガリー), 2016年刊行予定

Yukiko Saito, Inspirational Words, *文芸学研究*, 第19号, 2015, 20-25

Yukiko Saito, A Bright Lifeforce Image in the *Iliad*: On the Metaphorical Function of *Phoinix*, *京都精華大学紀要*, 査読有, 第44号, 2014, 27-57

Yukiko Saito, A Devine-related Shade: *kelainos* in the *Iliad*, *京都精華大学紀要*, 査読有, 第42号, 2013, 3-26

西塔由貴子, ホメロスに見られる色彩表現の一考察 *φοῖνιξ* が象徴するもの、ギリシア・ローマ神話のアレゴリー その表現・解釈・理論に関する研究、2013, 39-62

〔学会発表〕(計10件)

Yukiko Saito, Insights on Brightness in Homer's *Iliad*, 2015/16 Edinburgh Postgraduate Classics Seminar Series, 2016年3月24日、エディンバラ大学(英国)

Yukiko Saito, Some Remarks on Brightness in Homer's *Iliad*, Liverpool CLAH(Classics and Ancient History) Work-in-Progress seminar, 2016年3月17日、リヴァプール大学(英国)

Yukiko Saito, Brightness and Movement of Argos in Homer's *Iliad*, *Sapiens Ubique Civis III*, 2015年8月27日、セゲド大学(ハンガリー)

西塔由貴子, ホメロスに見られる色彩世界の一局面 *Argos* を中心に、第66回日本西洋古典学会, 2015年6月7日、首都大学東京(東京)

西塔由貴子, ホメロスに見られる色彩世界の一局面—*Argos* を中心に、京都大学西洋古典研究会4月定例研究会, 2015年4月25日、京都大学(京都)

Yukiko Saito、A Fast-flash Shining Aspect of Homeric Colour Expressions. RICERCHE A CONFRONTO 2015、2015年3月12日、ボローニャ大学(イタリア)

Yukiko Saito、A Luminous World in Antiquity: A Study of 'Argos' in Homer's *Iliad*, Institute of Classical Studies Early Career Seminar Spring、2015年3月5日、ロンドン大学(英国)

西塔由貴子、「輝く」は「はやい」？—ホメロスに見られる明るい色彩世界の—考察、第56回文芸学研究会、2014年12月20日、同志社大学(京都)

Yukiko Saito、Colour in Homer、Beyond Exoticism: Opening up Remote Cultures British Academy Early Career Networking Event、2014年9月8日、リヴァプール大学(英国)ポスター

Yukiko Saito、What is *phoinix*?: a study on the transformation of colour in translating myth、8th London Ancient Science Conference 2014年2月17日、ロンドン大学(英国)

〔図書〕(計1件)

Y. Saito、The Uncertain World of Darkness in the *Iliad*, in V. Bogushevskaya and E. Colla (eds.), *Thinking Colors: Perception, Translation and Representation*, Cambridge Scholars Publishing(英国)、査読有、2015、95-117)

〔書評〕(計1件)

Y. Saito 査読有
E. Barker and J. Christensen. Homer: a beginner's guide. London: Oneworld Publications, 2013, Bryn Mawr Classical Review, USA(米国)
<http://bmcr.brynmawr.edu/2014/2014-06-13.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西塔 由貴子 (SAITO, Yukiko)
京都精華大学・人文学部・講師
研究者番号: 60411948